

古墳時代の始まりを考える

はじめに

二〇〇三年五月、日本考古学に大きな波紋を投げかける発表があった。AMS（加速器質量分析法）による炭素14年代測定法によって弥生時代の始まりが、従来の見解より約五〇〇年さかのぼる紀元前九〇〇年前後と算出されたというものである。現在、発表資料の評価をめぐって賛否両論が出され、さらなる検証作業が進んでいるところである。弥生時代の暦年代は、日本を取り巻く東アジアの情勢、とりわけ中国の史書に記された倭国の記事を読み解く上でも重要な問題である。それは、倭国が国としてまとまりを形成する古墳時代の年代にも関わってくるからである。ここ

では、AMS法による弥生時代前期の年代算出に先だって行われてきた、弥生・古墳時代の年代に関する近年の研究動向を概観し、古墳時代の始まりについて考えることにしたい。

白井久美子

1 弥生時代から古墳時代へ

(1) 弥生時代中期末〜後期の暦年代

かつて、弥生時代中期末の暦年代に関して、北部九州地方と近畿地方では一五〇〜二〇〇年の見解の相違が生じていた。北部九州では甕棺から出土する中国鏡の年代や楽浪郡の遺跡で出土する大陸系の文物によって、中期末を紀元前後〜一世紀前半としてきた。一方、近畿では中期末にピー

古墳時代の始まりを考える

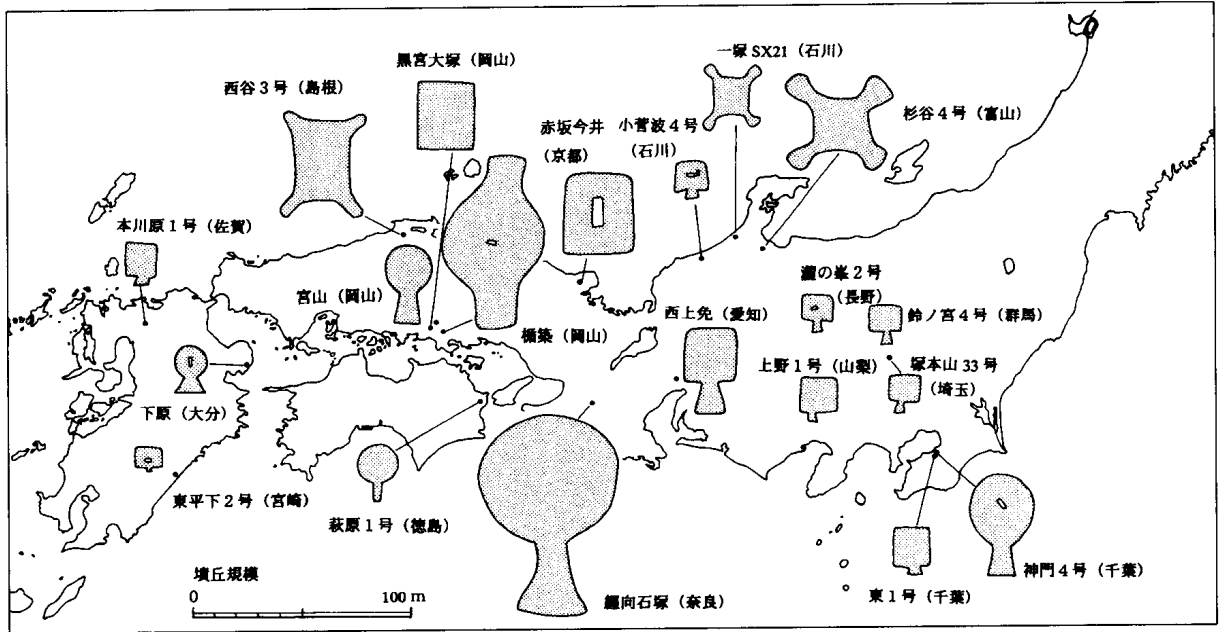


図1 列島各地の出現期古墳

中国・朝鮮との関係		■前方後方墳 □方墳 ☆房総の古墳 ()の数字は墳丘長m		
		日本列島		
		西日本	東日本	(房総を中心として)
57 奴国後漢へ朝貢	弥生後期	弥生後期 奴国連合 「漢委奴国王」金印		
107 倭国王師升後漢へ朝貢		平原(18) 伊都国王墓 特定個人墓の成立		
147 後漢 桓帝 「桓靈の間、倭国大いに乱れ・・・」 (『後漢書』)		原田中(26) 単独掘地の大型方墳!		
倭国大乱時代の終息期	180			
188 後漢 靈帝	卑弥呼の時代	楯築(70~80) 瀬戸内の新興勢力 ☆□菊間1号(17~20)		
189 公孫度遼東太守となる		□黒宮大塚(33) ☆□加茂1号(19)		
204 公孫氏帯方郡分立		□西谷3号(40) □赤坂今井墳丘墓(37) ☆□東1号(17)		
220 後漢滅亡	200	□東平下2号(12) ☆□長平台1号(17)		
239 倭女王卑弥呼、帯方郡經由で魏に遣使 「親魏倭王」金印と銅鏡100枚を授受	現期	奴国滅亡、邪馬台国隆盛		
241 卑弥呼没		□旭一塚 SX21(18) ☆神門5号(43)		
265 西晋建国		■西上免(40) ☆神門4号(49)		
266 倭女王壺与、西晋に遣使 (壺与最後の朝貢)	250	鶴尾神社4号(40) ☆神門3号(49)・■高部30号(34)		
	古段	ホケノ山(90) ■弘法山(66) ☆■高部32号(31)		
		☆ ■滝ノ口向台8号(55)		
		■駒形大塚(64)		
	階	■元島名將軍塚(95)		
		■藤本観音山(116)		
		津古生掛(33) 宿東山1号(22)・■国分尼塚1号(53)		
280 西晋、呉を滅ぼし中国を統一		宮山(38)		
		箸墓(276) 前方部超大型化		
		■権現山51号(43)		
		■都月坂1号(33) ☆■北作2号(34)		
		雪野山(70) ☆■東間部多2号(36)		
		□神原神社(35)		
		桜井茶臼山(207) ■元稲荷(94) 前橋天神山(129)		

表1 出現期から前期前半の列島内古墳一覧

クのある高地性集落と『後漢書』にみえる「倭国大乱」の記事を対応させて、一八〇年前後、すなわち二世紀末と推定していた。この年代差は邪馬台国の所在地論争と相まって近年まで解決を見なかった。新の王莽によって紀元一四〇年に廃止された五銖銭や新たに鑄造された貨泉が中期末の土器に伴う例が西日本各地にあり、土器と同時代のものがあるとすれば九州の年代観と一致するが、それらが入手後長期にわたって保有されていたとすれば同時代のものとはいえない。しかし、年代差の検証が進められるうち、両地域に挟まれた瀬戸内海地方の土器と北部九州・近畿地方の土器が伴出することが明らかになり、これらがほとんど同時期のものであることがわかってきた。すなわち九州の年代観の方が暦年代に合致すると考えられるようになった。

一方、一九九五年には大阪府池上曾根遺跡で出土した大型建物のヒノキの柱で年輪年代が測定され、紀元前五二二年に伐採されたという結果が出された。建物周辺からは中期末の土器が出土しており、近畿地方の弥生時代中期末〜後期初頭が紀元前後〜一世紀前半であることを裏付ける資料が提示されたのである。このように考古学・年輪年代法によって、西日本の弥生時代中期末の年代が再検討された結果、近畿地方の弥生時代後期の年代もさかのぼり、古墳時代の始まりがあらためて見直されるようになった。

(2) 倭国大乱時代の終息と古墳時代の始まり

漢王朝の成立によって東アジアでは小国連合の動きが高まり、後漢の時代になると北部九州勢力にも連合してまるとまる動きが活発化し、覇権をめぐる抗争はやがて西日本全体を巻き込んだ「倭国大乱」に発展する。『後漢書』によれば、それは桓帝（一四七〜一六七）と靈帝（一六七〜一八八）の間のことであったという。奈良県東大寺山古墳の「中平（一八四〜一九〇）」銘の大刀は、大乱終息期に近畿の勢力が漢王朝との接触を図ったことを示唆し、北部九州連合に替わって東日本をも視座におくことのできる勢力¹¹倭王権が台頭していたことを物語る。

これに呼応するように、瀬戸内・山陰・近畿・北陸に前代とは飛躍的に規模の大きい首長墓が出現し、列島内に広域圏が形成されたことがうかがえる。これらの首長墓の墳形は、地域によって特徴的な形態を採るが、突出部をもつ点が共通する。瀬戸内海沿岸では岡山県の楯築墳丘墓¹²に代表されるような円丘に突出部の付く形態、山陰から北陸地方では四隅が突出した方墳や大型の長方形墳、近畿・東海地方以東では突出部をもつ方墳が中心である。このように、この時代は各地の広域首長墓の個性が強く、倭王権と地域の拠点があたかも都市国家のように点と点で結ばれていた

古墳時代の始まりを考える

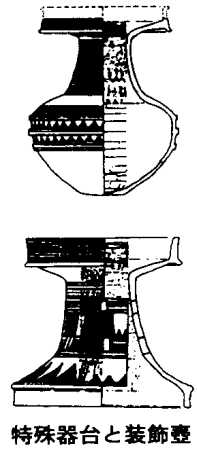
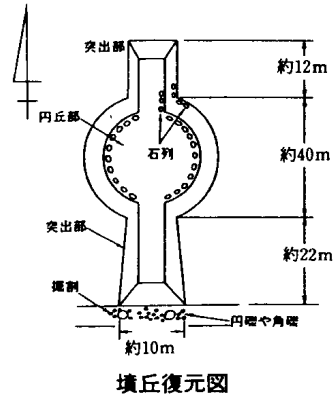
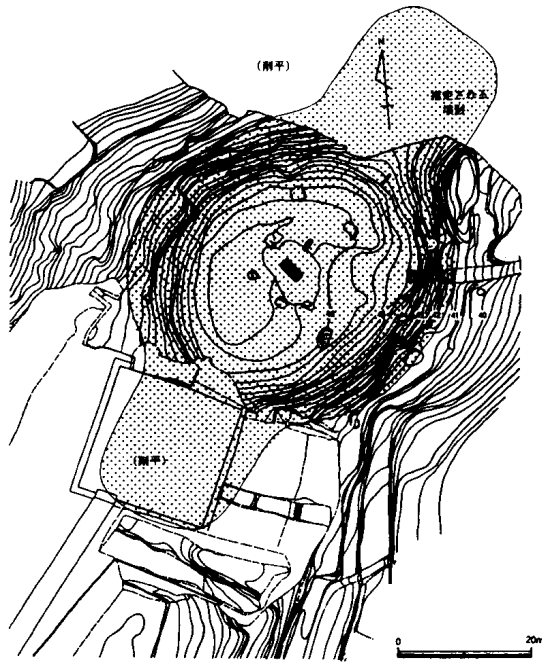


図2 岡山県倉敷市楯築遺跡墳丘墓 (古墳時代出現期前半)

状況が考えられる。

関東地方では、特定の個人墓として単独で掘地する大型方墳が現れ、鉄剣(短剣)・ガラス玉などの装身具を普遍的に副葬している。それらは墳丘裾の一隅、あるいは中央に通路状の突出部をもつ墳形で、次第に中央に突出部をもつ形態に収束する。列島の東縁に位置する房総でも、この時期の方墳が東京湾沿岸の養老川・村田川下流域に集中して見つかっており、西日本の弥生文化波及を象徴する小銅鐸の分布と重なる。やがて小銅鐸の終焉と前後して、養老川下流域に画期的な首長墓が築かれる。円形の主丘と前方部から成る新たな墳形を採用した市原市神門古墳群である。

2 倭女王の時代前半の古墳

関東地方に、畿内型の前方後円墳に先行する高塚古墳が存在することを明らかにしたのは、一九七七年の神門4号墳の調査報告であった(田中一九七七)。次いで、神門5号墳、神門3号墳の調査成果が報告・検討され、東日本の出現期古墳を代表する前方後円墳として注目されるに至った。4号墳の調査成果が発表された当時は、地域色の強い弥生時代の墳丘墓として扱う見解が大勢を占めていたが、その後の各地の調査例に加えて、倭王権周辺部の様子が明

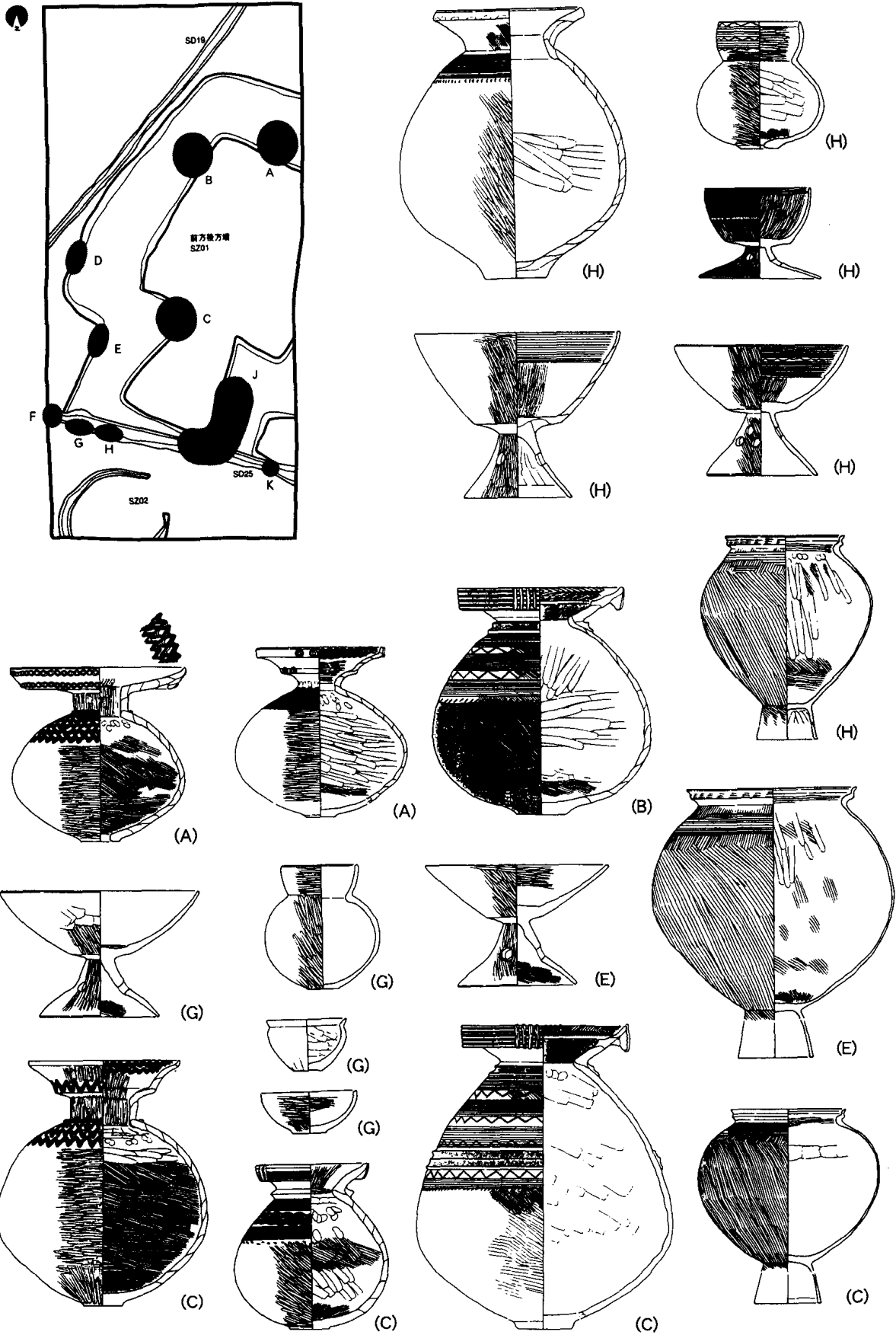


図3 愛知県尾西市西上免古墳出土土器 ()は出土地点

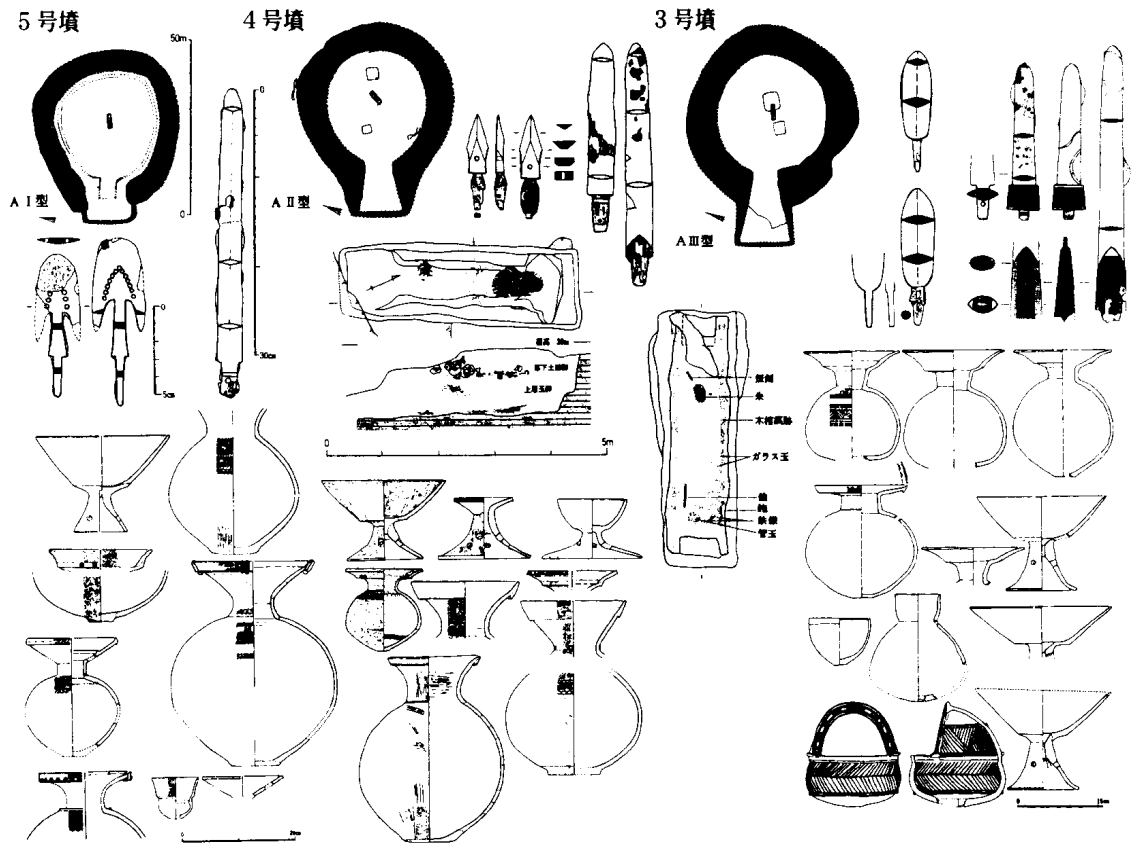


図4 神門5・4・3号墳の墳形と主な出土遺物

らかになるにつれ、これらの築造が列島規模の大型前方後円墳の出現と軌を一にすることが明らかになってきた。それまでの方墳が一辺二〇m規模であったのに対し、神門古墳群は墳丘長四〇mを超える飛躍的な規模と内容をもち、前方後円墳の成立期に連続して築かれた三代にわたる首長墓である。また、この頃東海西部には、墳丘長四〇mの前方後方墳・西上免古墳が出現している。これらの背景には、倭王権の対外交渉によって北部九州に限られていた鉄器の普及が東日本にもたらされ、列島規模で進んでいた革新の動きを率いる新時代の首長誕生の必然性があったと思われる。

『魏志倭人伝』に「鬼道に事え、能く衆を惑わす」と記された倭女王卑弥呼は、二二九年帯方郡經由で魏に遣使し「親魏倭王」の金印と銅鏡百枚を授与された。卑弥呼は新しい祭祀体系・墓制を革新した新時代の倭王として、鏡の配布に象徴される政治体制を確立したと考えられる。中国王朝の権威を内包する銅鏡を入手し、特定の有力勢力に配布することによって国内の同盟関係を強化し、政権を維持するという今までにない政治体制を執った。

大和三輪山の麓に築かれた全長九六mにおよぶ纏向石塚古墳、全長九〇mのホケノ山古墳はこの頃の代表的な大型前方後円墳である。前方部が大型化した新しい墳形は倭国

の新時代を築いた女王の意図によるものであろう。

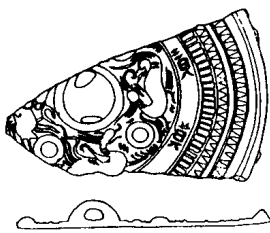
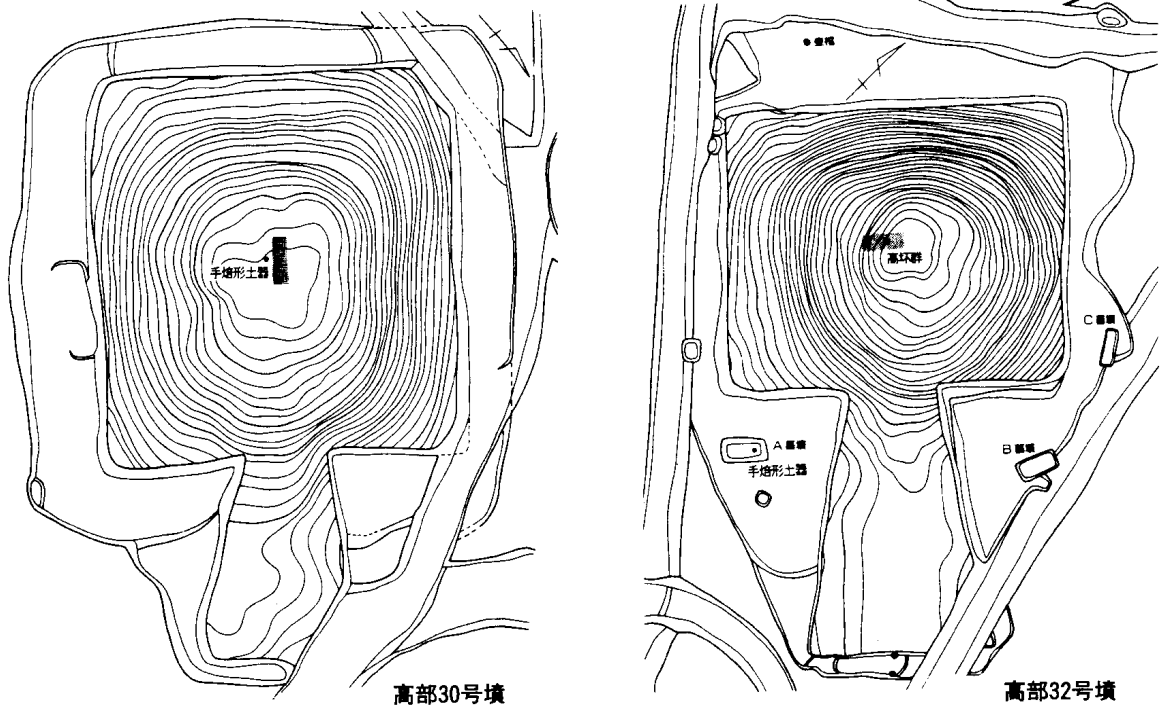
3 出現期古墳の調査例

さて、ここで内部施設・副葬品、および古墳祭祀の内容を明らかにした出現期古墳の調査例を挙げることにしたい。前掲の神門4号墳・5号墳では、墳丘下地表面・特殊埋納遺構（竪穴遺構）・埋葬施設・墳頂部で数工程の葬祭儀礼が行われ、特に4号墳では埋葬に際して特異な玉破碎儀礼が行われている。それらの儀礼には在来の土器とともに東海西部系・畿内系・北陸系土器が用いられており、弥生時代後期以来の東海地方以西との活発な交流によって発達した集落を背景にもつ。神門3基の時期決定資料には、墳頂部の供献土器群が指標となる。5号墳では北陸系・東海西部系、4号墳・3号墳では畿内系・東海西部系土器が認められ、他地域の土器との比較が可能である。これらの土器群は弥生時代後期と古墳時代前期との間に区分される出現期の新段階に位置づけられ、神門3基は三世紀中葉前後の短期間に築造されたものと考えられる。しかし、神門古墳群に後続する首長墓は地域内になく、また、前期の広域首長墓（姉崎古墳群）の系譜にもつながらない。このことは出現期の大型古墳が他に先駆けて倭王権と特別の結びつき

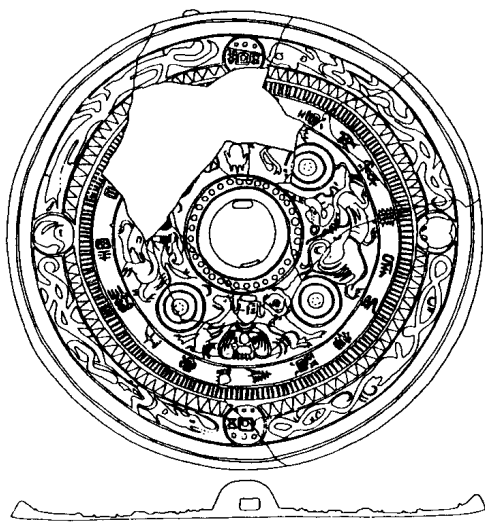
をもった首長墓で、初期倭王権の拠点的支配の時代色を強く反映していることを示している。

一方、東京湾東岸南部の小櫃川下流域には、神門3号墳とほぼ並行して小型の前方後方墳2基が築かれている。全長三四mの木更津市高部30号墳と三一mの高部32号墳である。30号墳には二神二獣鏡の破碎鏡と鉄槍二本、32号墳には「上方作」系斜縁浮彫式獣帯鏡の破碎鏡と鉄槍二本が副葬されており、後漢〜三国時代初期の鏡をもつ同系の被葬者が連続して埋葬されたことがうかがえる。「上方作」系斜縁浮彫式獣帯鏡は、九州以東で漢鏡の出土数が飛躍的に増える時期（岡村秀典による漢鏡七期第一段階）に過半数を占める代表的な鏡である。この段階は、前段階の鏡の分布が九州に収束していた状況が一変し、九州から近畿にかけてほぼ均等に分散し、関東地方まで分布域を拡大している。その背景には、楽浪郡の復興による漢鏡供給の保証と、倭国大乱の終息によって地域間交流が活発化したことがあげられている（岡村一九九九）。

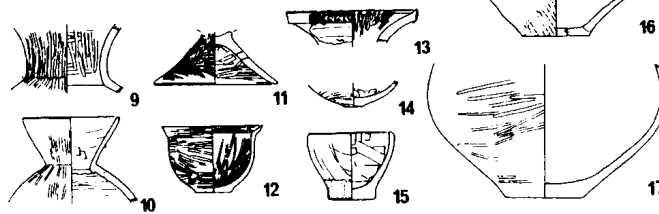
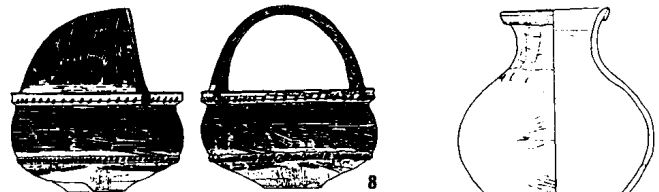
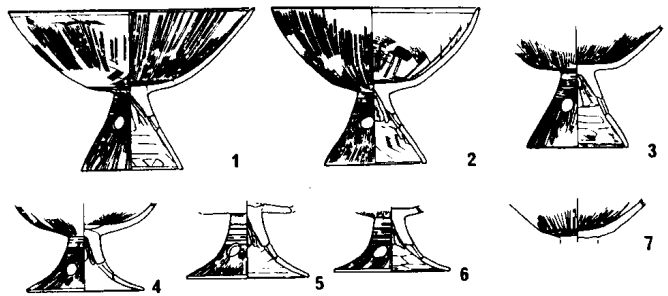
この浮彫式獣帯鏡は、畿内では前期古墳から出土する例が多いが、畿外では弥生時代後期末〜古墳時代出現期に副葬され、弥生時代後期に系譜のある破碎鏡の副葬はすべて畿外に見られるのが特徴である。同時代の飛禽鏡・画像鏡なども同様の現象を示す。このことから、これらの鏡は二世



32号墳出土「上方作」系斜縁浮彫式獣帯鏡

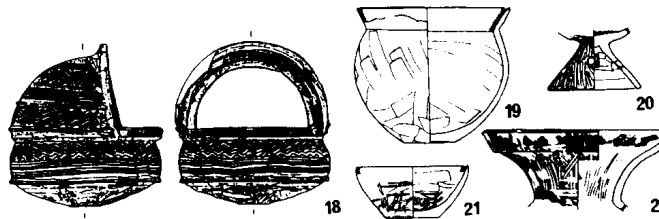


30号墳出土二神二獣鏡



高部32号墳出土土器

1~6 墳頂部 7 墳丘上層 8・9 A墓壙上面 10 A墓壙内
13~14・16・17 前方部南西側周溝 15 後方部北東辺周溝



高部30号墳出土土器

18 墳頂部 19・20・22 後方部南西側周溝 21 墳丘中層

图5 木更津市高部古墳群

紀後半のうちに流入し、畿内から一元的に分配されたものではなく、自然な流通によって列島各地に波及したことが指摘されている(同上)。また、高部30号墳から出土した二神二獣鏡は、漢鏡七期第三段階の画像鏡と斜縁神獣鏡の中間的な型式で、三世紀前半代に位置づけられている。破碎の後副葬するという弥生時代の風習を受け継ぎ、入手後まもなく副葬されたことがうかがえる。

一方、高部古墳群の墳頂部・周溝内の土器群には共に東海系の高坏や手焙り形土器があり、それらの比較からは30号墳が神門3号墳にほぼ並行し、32号墳が後続すると見られる。墳丘の比較でも32号墳の前方部が明らかに30号墳より発達しており、土器の特徴に対応する。小型の前方後方墳は、方形の主丘と突出部をもつ方墳の系譜にあり、次第に前方部が発達し、定形化・大型化する。同じ流域(小櫃川)では手焙り形土器を出土している全長五〇mの袖ヶ浦市滝ノ口向台8号墳が後続する大型前方後方墳として注目され、前期古段階の前方後方墳(君津市駒久保6号・道祖神裏古墳)が続く。

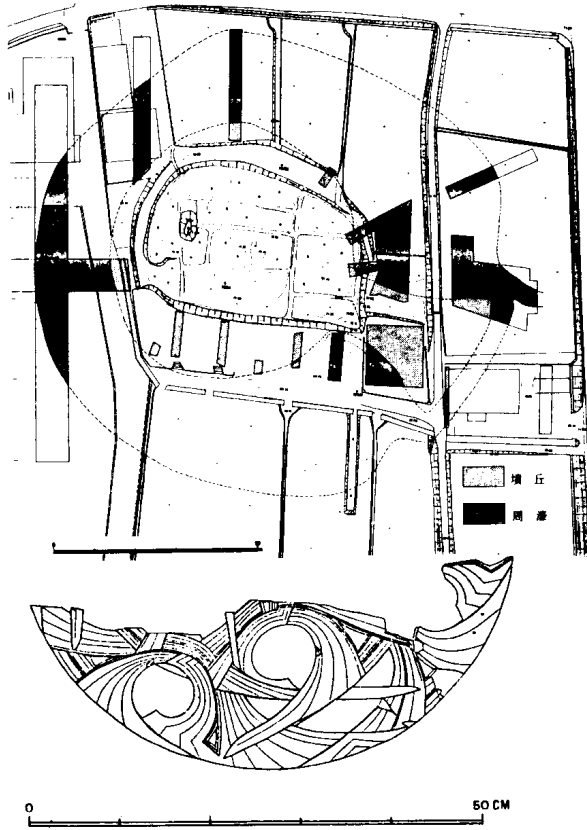
やがて東日本では主要な前期大型古墳が前方後方墳で占められるようになり、西日本の前期前方後円墳と対照的な分布を示すようになるが、高部古墳群はその端緒となる首長墓のひとつである。

4 倭女王の時代後半の古墳

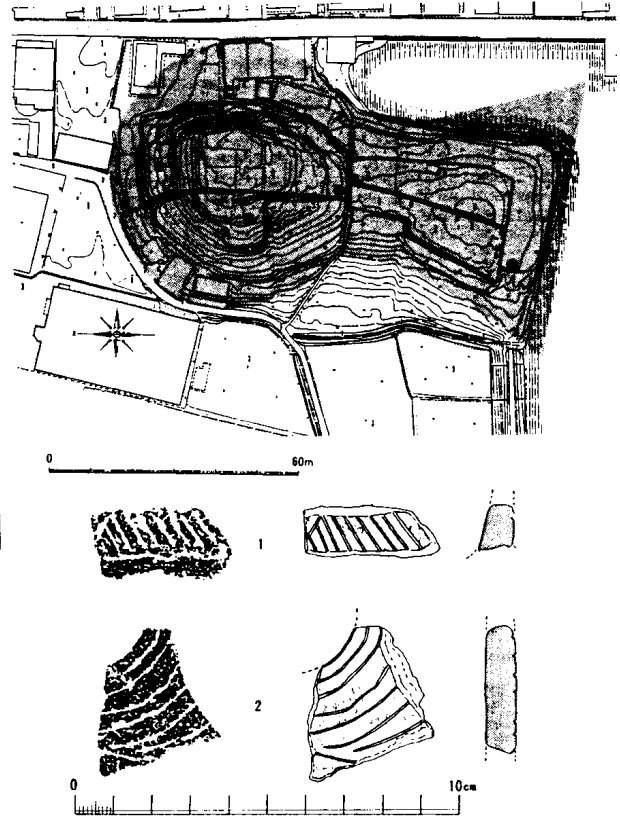
東日本で前方後方墳が大型化し、全長一〇〇mにおよぶ例が築かれる頃、王権中枢部には全長一一四mの馬口山古墳、全長一二〇mの中山大塚古墳が現れている。両古墳は前代よりさらに前方部が大型化し、前方後円墳として定形化した形態に発達している。また、円筒埴輪の祖形と考えられる特殊器台形埴輪を出土している点も次の段階へ発展する要素である。やがて全長二七六mの箸墓古墳が四段築成の巨大な墳丘に葺石をめぐらし、壺形埴輪・特殊器台形埴輪を樹立して姿を現す。この壺形埴輪・特殊器台形埴輪の特徴によって、箸墓古墳は三世紀後葉に築造されたものと推定される。この超大型前方後円墳は、初期倭王権の到達点を象徴する記念物といえよう。箸墓古墳の埋葬施設は未調査であるため、その副葬品の内容は不明であるが、大量の三角縁神獣鏡と進取の文物が副葬された黒塚古墳(一三〇m)、椿井大塚山古墳(一六九m)がおおよそ半分の規模の前方後円墳であることを考えれば、その内容は想像を超えるものであろう。

『魏志倭人伝』には二四七年倭女王が帯方郡に遣使し、狗奴国との交戦を報告したことが記されている。おそらく、

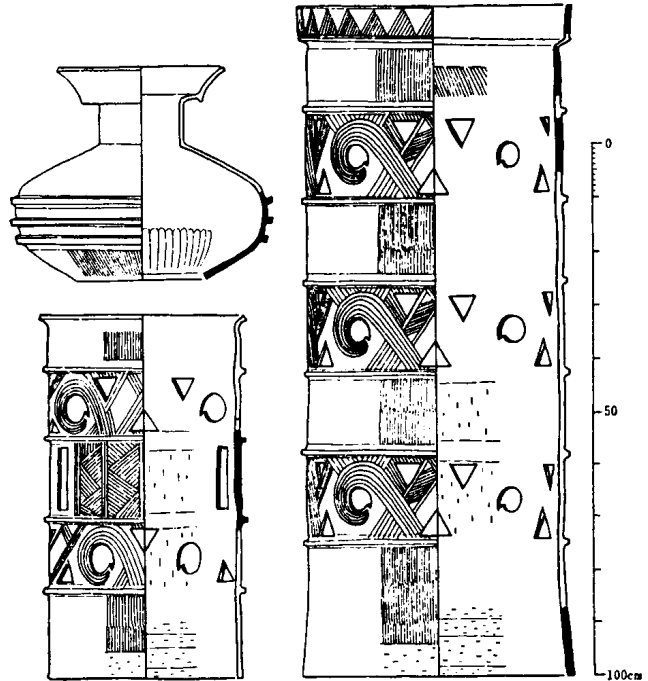
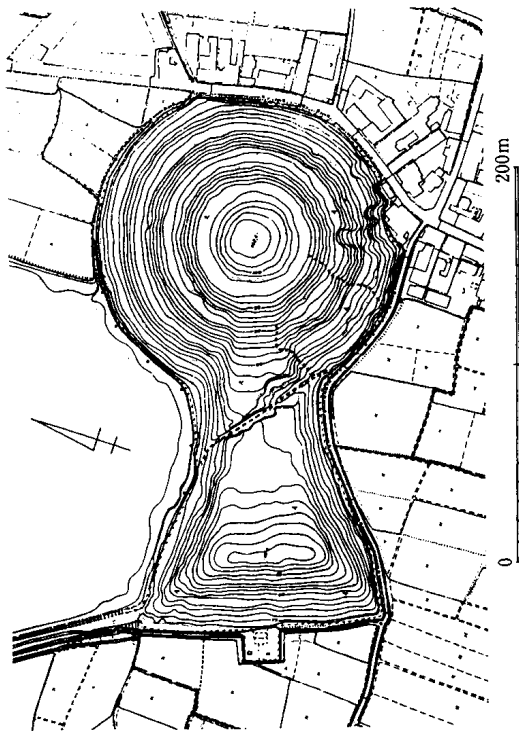
古墳時代の始まりを考える



纏向石塚古墳出土弧文円板



馬口山古墳採集の特殊器台



箸墓古墳出土の特殊器台と裝飾壺

図6 大和・三輪山麓の初期王墓群

卑弥呼はこの交戦中に没したと見られ、「卑弥呼以死、大作冢、径百余歩、殉葬者奴婢百余人」の記事によって壮大な墓が作られたことがわかる。やがて壺与が女王を継承し、およそ二〇年にわたって中国王朝との交渉を背景に倭王権の強化と安定を図る。そして、二六六年倭女王は西晋に遣使したのを最後に中国王朝への朝貢を終止したものか、中国の文献から姿を消している。こうしてみると、従来の通説のように箸墓を倭女王の時代前期に在位した卑弥呼の墓とするには年代的に無理があり、政権後期を執政した壺与の時代に倭王権は安定し、その墓が古墳時代前期最大の規模に達したものと思われる。

5 まとめに代えて

一九八九年、福岡市小郡市で開かれた埋蔵文化財研究会に参加した折、房総の古墳時代出現期について発表を行った。当時は、北部九州と近畿地方で弥生時代中期～後期の年代観に大きな開きがあり、古墳時代の開始期をめぐる見解も近畿地方を中心とする四世紀開始論が多数を占めていた。房総ではすでに神門古墳群の成果が報告されており、それらは弥生時代後期と古墳時代前期の間に出現した画期的な古墳であること、倭国大乱終息期以降の各地の動きを

新たな時代に含める考えを発表した。これに賛同してくれたのが北部九州の研究者と畿内の少数派であったことは、印象深い。

中国大陸・朝鮮半島に近い北部九州から関東地方まで波及した弥生文化は、列島の東西で独自の文化圏を形成していた地域を近づけた。一旦できた流通網は、政治体制を越えて様々な情報を伝えている。北部九州で起こる弥生時代後期以降の変革は、時を経ずして関東地方に伝わる素地ができていたのである。倭王権の本拠地が北部九州ではなく、近畿地方に成立したことは考古学的な証左から動かし難いといえよう。しかし、すべてが近畿地方から発信されていたとは限らない。弥生時代後期には、後の戦国時代のように、文化的にも政治的にも力をもった各地の勢力がそれぞれ独自の基盤をもって台頭していたからである。東アジアを揺るがす漢帝国の存在は、国としてのまとまりをもたない倭の人々にとって最大の脅威であり、それを真っ先に察知していたのは北部九州の勢力である。しかし、宗教的な権威というカリスマ性によって各地の勢力を引きつける求心力を得たところに倭王権の利があったといえよう。

前掲のように弥生時代中期末～後期初頭の土器の位置づけが見直されるとともに、いままで未調査であった倭王権中枢部の大和の古墳が調査されるにおよんで、現在では古

墳時代の始まりは四世紀をさかのぼり、三世紀中頃から前半とみるのが通説になった。また、倭国大乱時代の終末期に、吉備の新勢力の首長墓として出現した「楯築」をもって新しい時代が始まるという認識も一致しつつある。それを古墳時代の始まりとするか、弥生時代後期の新段階とみるかは、その後の首長墓をどちらの時代につなげて捉えるかに拠る。「楯築」以後の列島各地に見られる広域圏の形成と交流を弥生時代から切り離して新しい時代に位置づけるならば、古墳時代の始まりは二世紀末～三世紀初頭にさかのぼり得る。

(なお、本稿は平成一六年三月刊行の『房総史学』No.44所収の拙稿に挿図を加え、本文に加除訂正をおこなったものである。)

註

(1) 出現期前半の古墳の名称には、「墳丘墓」「周溝墓」として報告されたものが少なくない。時代認識を明確にするため〇〇古墳、〇号墳に統一すべきところであるが、本稿では原則として報告の名称に従った。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 1 赤塚次郎ほか『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター一九九〇

古墳時代の始まりを考える

- 2 赤塚次郎ほか『西上免遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター一九九七

- 3 石野博信・関川尚功編『纏向』奈良県立橿原考古学研究所一九七六

- 4 岡村秀典『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館一九九九

- 5 小沢洋「南関東の前方後方墳」『前方後方墳を考える』第1分冊 東海考古学フォーラム一九九五(四六七―五六一頁)

- 6 桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『ホケノ山古墳発掘調査現地説明会資料』一九九五

- 7 清水眞一「平成十年冬季企画展『纏向遺跡一〇〇回調査記念 纏向遺跡はどこまでわかったか』桜井市立埋蔵文化財センター一九九八

- 8 白井久美子「房総の出現期・前期古墳の様相について」『第17回古代史サマーセミナー発表資料』一九八九(一八一頁)

- 9 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 国立歴史民俗博物館一九八四(四一―八二頁)

- 10 高橋護「組帯文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究報告』5 岡山県立博物館一九八四(一一―二一頁)

- 11 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』9 岡山県立博物館一九八八(一一―三二頁)

- 12 田中新史「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会一九七七(一一―二二頁)

- 13 田中新史「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号 早稲田大学考古学会 一九八四(一一五三頁)
- 14 田中新史「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化』46 大和書房 一九八六(八四—九四頁)
- 15 田中新史「奈良盆地東縁の大形前方後円墳出現に関する新知見」『古代』第88号 早稲田大学考古学会 一九八九(一二六—一三六頁)
- 16 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 一九八九
- 17 寺沢薫『桜井市箸墓古墳(纏向遺跡第81次)発掘調査概報』橿原考古学研究所 一九九五
- 18 東海考古学フォーラム『前方後方墳を考える』第3回東海考古学フォーラム三重県実行委員会 一九九五
- 19 豊岡卓之『古墳のための年代学』—近畿の古式土師器と初期埴輪— 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 一九九九
- 20 奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳』学生社 一九九八
- 21 萩原儀征・清水眞一・寺沢薫『纏向石塚古墳』範囲確認調査(第4次)概報 桜井市教育委員会 一九八九
- 22 橋本輝彦「纏向遺跡の発生期古墳出土の土器について」『庄内式土器研究』XIV 庄内式土器研究会 一九九七(一〇二—一二三頁)
- 23 春成秀爾「吉備と大和」『第9回古代史シンポジウム』全日空・朝日新聞社 一九九一(一三一—二二頁)
- 24 春成秀爾「弥生から古墳へ その変革過程」『日本考古学協会一九九二年度大会』研究発表要旨日本考古学協会 一九九二(六〇—六七頁)
- 25 埋蔵文化財研究会編『定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会 一九八八
- 26 埋蔵文化財研究集会編『前方後円墳の再検討』埋蔵文化財研究会 一九九五